

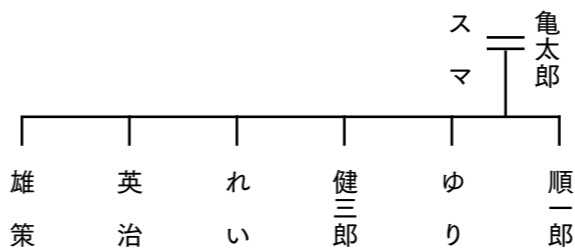


「亀倉家史略」



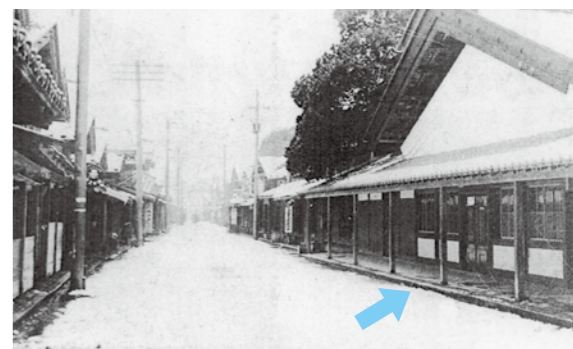
雄策さんの兄で、昭和30年から41年まで成城学校の理事長を務めた順一郎さんが、昭和36年に亀倉家の歴史をまとめたもの。当時の吉田町にあった亀倉家の平面図や写真などもあり、今回の記事の参考としました。

亀倉家の家族構成



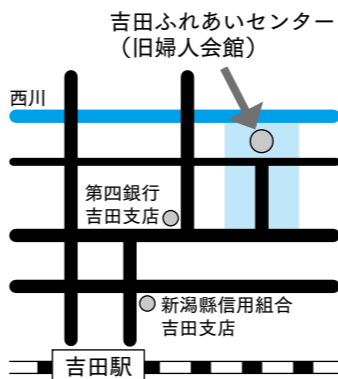
亀倉家6代目の亀太郎さんには雄策さんを含む6人の子どもがいましたが、亀倉家が東京へ移ったとき、長男の順一郎さんはすでに東京都(中野区)で暮らし、長女のゆりさんは結婚して出雲崎町にいました。

当時の亀倉家



写真右の大きな屋敷が、当時の吉田町にあった亀倉家。大正時代に撮影されたものと思われる。

亀倉家があったところ



この部分が亀倉家の敷地。『亀倉家史略』には「現在宅地は整理され真中に二間の道路を通じ両側は分譲されて家屋がたち、自家用畑地には町役場が建築」と記されています。「町役場」は現在の吉田ふれあいセンターの場所にありました。

に資産を増やすかと思われました。しかし、亀倉家は次第に斜陽の道をたどります。

亀太郎さんは実に多趣味な人でした。当時としては珍しい写真機を所有して写真を楽しみ、書画や骨董はもちろん、盆栽などにもかなり凝ったようです。

雄策さんの兄・順一郎さんがまとめた『亀倉家史略』によれば、この「いろいろの事を試みる癖」が災いします。「第一次世界大戦中の経済界の変動を利用して株式を試みたりしたためついに再び改革をしなければならぬ結果となった」。

「改革」とは住み慣れた家を手放すということでした。

突然、それも突然なんだ。大地主の亀倉家が没落した。なぜか没落したんだ。(中略)私のオヤジというのは無口でね、その没落の原因については、詳しく語らないから今でもわからないんだよ。(『亀倉雄策の直言飛行』、174・175ページ)

大正13年ごろ、亀倉家は吉田町を離れます。雄策さんの記憶では7歳か8歳のとき、東京郊外の武蔵境に土地と家を買いました。

父が準備のために先に東京に行った。数日後に母と兄と私が、人力車で駅に行った。(中略)やがて煙をはきながら汽車が出て手をふった。見送りの人たちも手をふっている。なかには泣いている人もいた。すると駅の売店のおかみさんが菓子袋を持って、走りはじめた列車をおっかけてきた。私が受け取るとおかみさんが大きな声で、「おぼっちゃま、大きくなったら偉い人になって帰ってきなさいよ」と叫んだ。この声は、なぜか私の心のなかにいつまでも染み透るように残っていた。車窓の風景は、流れるように後ろに、後ろにと移ってゆく。もう、この景色を再び見ることはない。幼いながら自分でもわかっていた。「偉くなって帰ってきなさいよ」とおかみさんが叫んでも、帰る家屋敷の無いことはわかっていたからだ。(同11・12ページ)

昭和2年、亀倉家の敷地の一部は、役場庁舎建設のため町に買取されます。記録によると、買取代金は4万円でした。

佐藤久弥さん

●さとう・きゅうや / 90歳

亀倉雄策さんの姉・ゆりさんの子ども。雄策さんの甥に当たります。ゆりさんに連れられ、当時の亀倉家へはよく遊びに行きました。また、大学生のころは武蔵境の亀倉家に居候をするなど、当時の亀倉家のことをよくご存じです。4歳しか離れていなかった雄策さんとは兄弟のような間柄でした。新潟県庁を退職後、(社)新潟県労働衛生医学協会の経理部長を10年、常勤監事を18年勤められました。現在は千葉県佐倉市に移られ、趣味の絵やギターを楽しんでいらっしゃいます。

●亀倉家が当時の吉田町から東京へ移ったのは、雄策さんが7歳か8歳ぐらいのとき。そのときのこととは覚えていらっしゃいますか?

「うっすらと覚えています。『ああ、もう吉田の家がなくなるのか』という記憶がありますね。わたしが小学校にあがるちょっと前からいだったんじゃないかと思うのですが…」

●その吉田の家には何回か行ったことがあるんですね?

「ありますよ。母親が年に何回か実家に帰るとき、わたしと一緒に連れていってくれました。駅に着くと人力車が待っていてね。それに乗って家まで向かいました」

●人力車ですか。やはり相当な大地主だったんですね。

「亀倉家は家族を『さま』付けで呼び合っていましたからね。『おばさま』とか『おばあさま』とか。雄策のことは『ゆちゃま』と呼んでいましたよ(笑)」

●雄策さんはどのような子どもだったのですか?

「小さいころからきかん坊でした。すぐ上の兄の英治は体が弱くおとなしい子でしたので、友達に

いじめられると泣いて帰ってくるんです。それを見た雄策は家から飛び出し、兄の敵討ちをしてきたと聞いています」

●兄の敵討ち? すごいですね。

「わたしもよくいじめられたものですよ(笑)。とにかく負けん気が強かった。だから、あれほどの人間になったのだと思います」

●そのほか、雄策さんのことで覚えていらっしゃることはありますか?

「わたしが小学校6年生ぐらいのころの話です。父親に連れられて武蔵境の亀倉家へ行きました。そのとき雄策は中学校の3年生か4年生ぐらい(※当時の中学校は5年生まで)だったと思うのですが、わたしの父にマッチ箱のデザインを見せていたのを覚えています。自分が好きで描いたのか、誰かにたのまれて描いたのか分かりませんが、中学校を卒業するとすぐにデザイナーを目指し、5円玉1枚を握って家を飛び出して行ったそうです(笑)」

●さて、亀倉家が没落した本当の理由とは何なのでしょう?

「株や相場などに手を出したのが原因と聞いていますが、雄策の父

である亀太郎は何も話さない人でしたから、だれも本当のところは分からないのです」

●東京の武蔵境には親戚や知人を頼って行ったのでしょうか?

「いいえ、誰もいなかったと思いますよ」

●では、家も土地も新たに求めたのですか?

「そうです。それも200坪はある大きな土地でした。亀倉家は没落したとはいえ、吉田の家も田畑も残りました。以前のような贅沢な生活はできなくなるかもしれないですが、そのままそこで暮らすことはできたはず。体裁が悪かったから東京へ出て行ったのだと思います」

●東京で亀太郎さんどのような仕事をしていたのですか?

「何もしていませんよ。私が大学生になって居候していたときも毎日のように絵を描いていました」

●働いていらっしゃらなかったのですか?

「ええ。それでも子どもたちを学校に通わせ、雄策以外は大学まで進学したのですから。それなりに暮らせる資産は持っていたのでしようね」